場合ならざる可らず、恐らく後の場合なりしならんが、何れにせよ中亞に葛兒罕として君臨するに至りて、初めて改元したるべきは極めて自然のことにして、此の點については本文の記載に疑を挾むべき餘地あるなし。從つて此の改元以來十二年間大石が葛兒罕の位にありしは疑ふ可らざると共に、大石死歿の一一四三年より、在位年數として擧げらるゝ二十年なるものを逆算すれば、其の位に上りし初めの年はまさに一一二四年卽ち甲辰の歲に相當するものなるを知るべく、（此の點については丁謙氏の考がふる所亦同じ）これ余が其の在位年數も年號の數も共に正しきものなりと主張せんとする所以なり。

遼史に載せたる西遼の開國に至る迄の記事の曖昧なること之を上に論じたるが如し。然れども此の曖昧なる點は主に其の年次と記載の順序とに關するものにして、記述せられたる事實については寧ろ正確を傳へたるもの少からず。こゝに論述せる所は、東西史籍に見ゆる所を斟酌して、主として其の年次を按配し、其の西徙の跡を闡明せんとしたるにすぎず。其の他の點に關しては別に之を他日の機會に期せんとす。

（大正五年二月稿、史林第一卷第二號）